

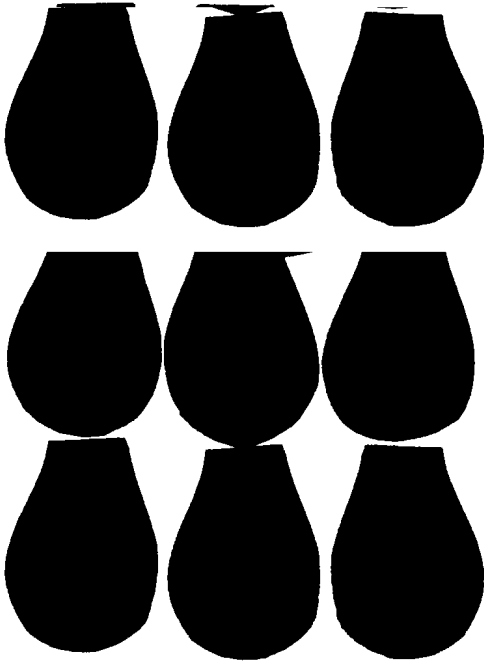
啄木

その愛と死

真下五一

その愛と死

三笠書房



啄木
その愛と死

一九七三年六月二十日 第一版発行

定価一五〇〇円

著者 真下五一

刊行者 竹内静江

発行所 三笠書房

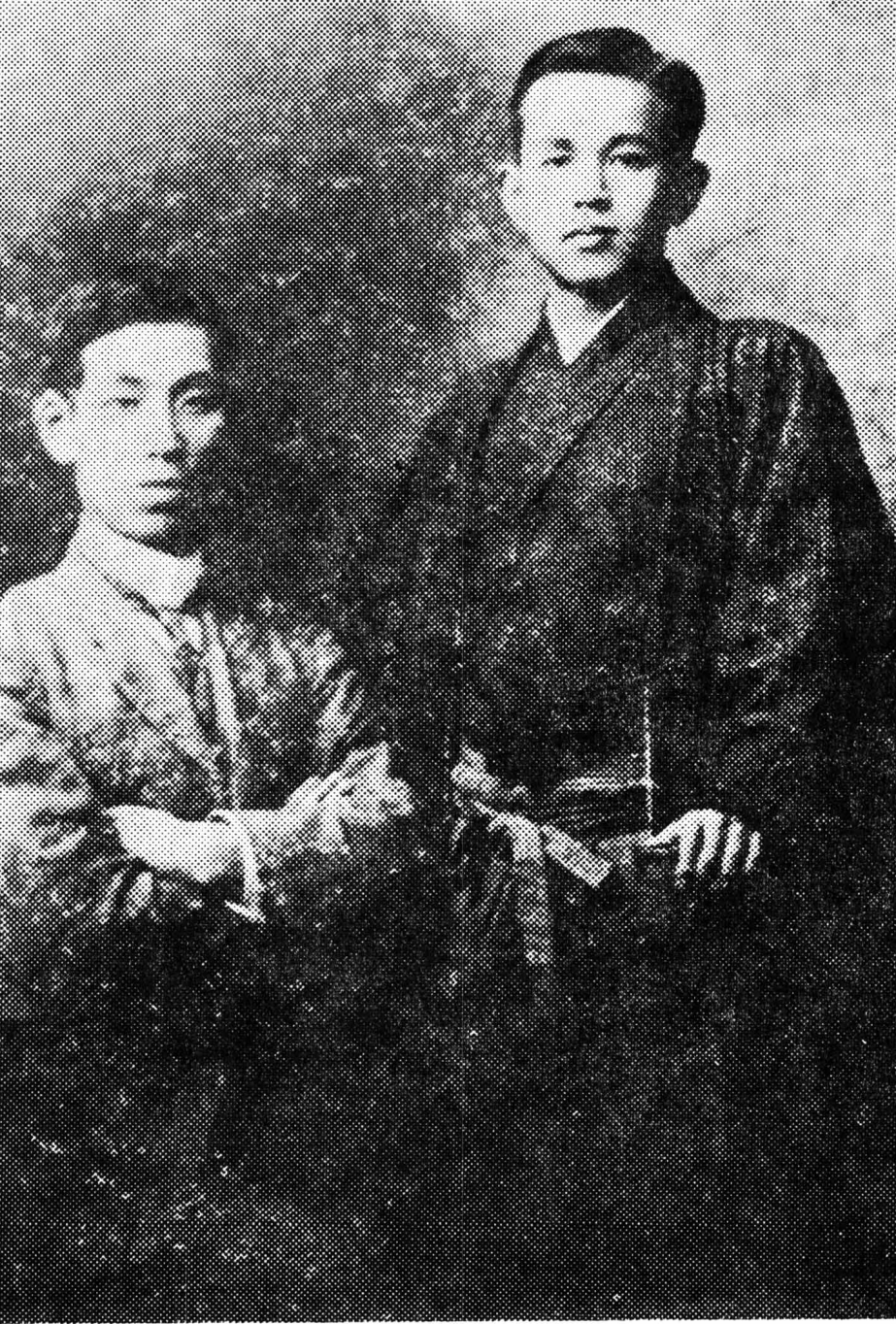
東京都新宿区戸山町三五番地
電話東京(〇三)七七八一番八代表
振替口座東京二二〇九六番

落丁・乱丁は本社またはお買い求めの書店でお取替えます。

臺灣印刷 日放印刷 宮田製本

© Printed in Japan

0093-001063-8937



石川啄木（右）と金田一京助（明治41年10月）

啄木
その愛と死
目次

第一章	父なる岩手山	九
第二章	烏の乱舞	三
第三章	山彦	六
第四章	血に染めし歌	六
第五章	東京の風	六
第六章	走馬灯の灯	一〇
第七章	啄木鳥	三
第八章	あこがれ	七
第九章	揺れる笹舟	一五
第十章	踊る先生	一七
第十一章	山も怒れば	一五
第十二章	火の海	二九

第十三章	小樽の形見	二四〇
第十四章	さいはての町	二五〇
第十五章	この父は	二六一
第十六章	友の涙	二六七
第十七章	三階の穴	二七五
第十八章	死との戯れ	二八〇
第十九章	床屋の二階	二八六
第二十章	みのらぬ果実	二八八
第二十一章	桜散る朝	二九三

装幀 内田克巳

啄木
その愛と死

第一章 父なる岩手山

「では、先週のつづり方の分をお返しします。二、三ともよく書けているのがありました。今回は堀合節子さんに読んでもらいましょう」

思いがけなくも自分の名を呼びあげられた節子はギクリとし、次の瞬間には恥ずかしさが先に立って「はい」と、蚊の鳴くような声で立ち上がったが、若い国語教師の顔ま

でが、少し紅潮してみえたほどであった。節子は起立してからも、まだモジモジと口ごもり、しばらくは級友たちの顔をうかがうふうであった。それは頭抜けて一番に取り上げられたことの恥ずかしさか、それとも作文の内容を公表させられることの恥ずかしさのためか、すぐにはだれにも読みとれなかったが、

「内容は少々おませのきらいはありますが、でも文章はよく整っていて、つづり方としては最もすぐれていました。さア、早く朗読してごらんさい」

と、再度先生からうながされると、蚊の鳴く声からはじまりながらも、次第に中ごろからその声も高まってくるのであった。

そういえば、まだはかまをつけている生徒もほとんどみられないこのミッション・スクールの盛岡女学校では、どちらかといえば朗らかな明かるい方の質で、別に恥ずかしがり屋の方でもないのであった。いつもは木綿じまの着物に瓦斯糸で織った黄赤などのまだら棒縫いの帯をお太鼓にしめ、髪を桃割れに結っていることが多かったが、きょうは珍しく、三つ編みのお下げ髪がかれんであった。

その作文の内容は、いつか盛岡郊外の茨島はらしまに行ったおりのことであろうか、「松並み木の街道に、今しずかな月光が冷たいしずくのように音もなく降りかかっており、帰りを急ぐ足を誘うように、どこからともなくやさしい口笛の音が漏れてくる。それはあたかも月光の精のように漏れてくる。思わず足を止め、引きこまれるように後ろを振り返ってみると、そこには同じ月かげに照らされた一人の美しい青年がたたずんでいた。……」というような内容の作文であった。

先生が指摘したように、たしかにおませなところがあるが、他の生徒たちには、むしろ作文のうまさ以上に、そのおませぶりの方が大きく興味をひきつけて、朗読の間は、さすがにシーンと静まり返ったのであった。

そして、その反動のように、節子が読み終わって着席すると同時にワーッと爆発が、ひととき教室内に渦巻いた。それは、このすばらしい作文をほめたたえてというよりは、この内容の方におおられての反響が大部分を占めて

いるふうであった。そして、それ以上にその主の節子に対しての羨望せんぼうがあった。

このことがあって以来、節子は一躍クラスのヒロインになった。そして感じやすい年ごろの少女たちは、あることないこと節子をやうわさの面でも取り囲み、その口笛青年と節子とが、今度は不來方城址こすかたじょうしの石がきにもたれて、手を握り合っていたというふうな、見たような話で持ち切りになつたりした。

しかし、そのヒロインの節子はまがいもなく盛岡の女学生であっても、いったいその月光下の口笛青年とはだれなのかと、これまた想像ばなしやうわさで持ち切りとなるのであった。といつても狭い土地のこと、その口笛青年とは、まだ青年というには早い、小倉服のよく似合う盛岡中学生の、石川一だということがわかるまでには、さほど時間もかからないことであつた。

堀合節子が顔をあからめて作文を朗読していたその同じ日、石川一もまた学校帰り、級友伊東圭一郎に、その節子のことを話し聞かせていた。

もうミンミンゼミが鳴きはじめていて、大空にはほうきで一はきしたよな雲の流れがあつた。別にきょうに限ったことではないが、一はよく道草をした。不來方城址に行くことが多く、新庄の天神山にも足を運んだが、きょうは何ということなしに圭一郎も一緒だつた。市の中央部に位置

する内丸通りの学校を出てから、二人の足は申し合わせたように東へ向かつてそのまま磯町の方へ出ていたのであつた。水の美しい中津川が誘つたというより、さわやかな雲の流れが、水の美しい中津川へ誘つたのかもしれないか。北上川の支流だけに、川幅はさして広くはないが、大きな酒だるなどのころがっている川原は夢をはらんでいて、それに蒼いサビ色の浮いている古銅の擬宝珠ぎぼうしゆのついた橋を見るのは好きであつた。

「一君、きみ、いつかつづり方で、この中津川の橋の擬宝珠のことを書いたことがあつたな、昔は上中下と擬宝珠のついた橋が三つかかつていたとか……」

「ああ、あれか、昔も昔、南北朝時代のことで、父から聞いた話なんだ」

その南北朝時代、当時の藩主であつた南部政行公が、はるばると吉野の行宮ぎんぐにはせ參じて勤皇の誠をつくしたことは歴史に残るところだけれども、月も花もおぼろにかすむ夜な夜な、時ならぬ鹿の声が起こつて後村上帝のみ心をいためつけるので、だれか歌をよんで、いまわしいその鹿の声をとめるものはないかという御詠みよが出されたことがあつた。その時「春霞秋立霧にまかふてや思ひ忘れて鹿や鳴らむ」と一首を詠じてこれを後山に立て札したのが政行公だつたという。するとそれ以來見事にきき目があつて鹿の声も止んだので、帝は公に『松風』と号する硯面を賜い、また京の加茂川の橋の擬宝珠を移し模することをゆるした

という。三戸城下の熊原川にかけられた橋の擬宝珠は盛岡築城とともに中津川に移されたが、これはそういう由緒のある橋だったのである。

圭一郎と一は、肩からななめにかけていた重いズックのカバンをはずして土手に投げ出すと、同時に二人も並んでそこに足を投げ出した。雲の流れは一層速くなっていた。そして清い流れにその美しい姿を浮かべていた。

阿部修一郎がクラスで一席の成績だとすると、続いて石川一や伊東圭一郎の他に小野弘吉、小沢恒一らが席次を競っていた。

ことに二人は仲よく、今度グループで新しい回覧雑誌を発行するため、その下相談が、それとなし暗黙のうちにあったのであるが、こうしてカバンを投げ出し、足も投げ出し、川原の土手に大の字になって雲の行くえを追っていると、ついその方の相談事はしり切れとんぼになりがちで、空想ばかりが羽をひろげるのであった。そういう熱気の前、川原を吹きぬける風は自然の心ある愛撫のようであった。一が上衣を脱ぐと圭一郎も脱いだ。あみだにかぶっていた帽子もそのまま後側に飛ばした。

「……ね、その擬宝珠のごとき優雅さ。それでいて子鹿のようなかれんさ。いや、鹿の足のようなスマートさというべきかな。まさにその優雅さとスマートさとを一つに備えた理想のおとめとは、この節子の君をおいて他にはなからう……」

ひとり悦に入って圭一郎を煙に巻いてしまう一であったが、その目もまた雲のかなたに天津おとめを追いみているかの風であった。

「……そのバイオリンの音はね、軽くやさしく、僕がちょうど勉強にいたいと思うころに鳴りだすんだよ。それはあたかも僕の気持ちを一足先に知っているみたいだよ……」

「ちくしょう！ やり切れんなア。空にさえずるトリーノーヨーだろ」

「鳥の声よりやさしくだよ、……するとほおづえついていた机から立ち上がっておもむろに僕は庭へおり立つんだ。数間ほど奥行きのある庭をかき根のところまで行くと、その裏があき地だろう。だから半丁ばかりある彼女の家とも、外の道から回るよりは便利で、実際は庭続きみたいなんだよ。へだてているのは、この半分こわれかけた竹がきと、そして、あき地の中央にあるリングの木くらいなものだ。ただね、彼女が部屋に閉じこもっている限り、声はすれども姿は見えずのヒバリなんだがね」

「庭に出てバイオリンひかないのか」

「まさか！ でもね、バイオリンのあとには必ず庭に出てくる。そして牽牛と織女はリングの木の下でっこり目と目を交わし合うのだ……」

「声の方は？ 無言劇か、ヒバリの逆なんだな」

「そこが目下INGなんだよ」

「なアーンだ！ 思わせぶりばかりしやがる！」

「だって、いま君に打ち明けるのが初めてなんだもの。わが恋が佳境に入るのは、いよいよこれからなんだもの。まあ、ゆっくり楽しみに待っていてくれ」

「ばかな！ そんな他人の美酒には僕は酔えんよ……それよりどうだ。担任の山羊を泣かせる方法でも考えんか！」

「……」

「なかせるといふのは「メー」とうたわせる意味ではないんだぜ。本当に人間らしく泣かせるんだ……」

「……」

「それにはね、今度の旅行はあつらえむぎのチャンスではないかと思ふんだが、君どう思う」

圭一郎はその実、一の恋の打ち明けをまじめに受け取っていたのではあるが、それにしても一方的におのろけを聞かされているばかりなのに反発する気持ちも手伝って、話題を急転させると、一気に押しまくるのだった。この山羊をやつつける話なら、きつと一も膝を乗りだしてくると思つたからで、別にそれほどの他意があつてのことではなかつた。

「「メー」となこうと「ワー」と泣こうと、俺はだいいち今度の旅行には、気がすすまないんだがなあ」

「だつて一ノ関回りの案にあんなに賛成していたではないか？」

「やむなく、旅行に参加する場合にはのことだよ」

「なんだい、そんなこと今ごろ言いだすのではこまるよ。ぜひ行けよ！ われわれグループは一人欠けてもこまるよ。そして、おそえもんとして山羊に泣いてもらうんだよ。きつと溜飲が下がるよ」

この場は、圭一郎の方に押しまくられた形だった。そして結局は一も参加に決められてしまった風であつた。

それから二人は、直ぐにはまだその場を去ろうとはせず、しばらく小石などを川面に投げたりしていたが、やがて過ぎしあの入学当時のころの話にまでさかのぼるのであつた。

「そういえば、君と僕とは下ノ橋高等小学校の時からずっと同級だつたね。あのころ君は工藤さんという伯父さんの家から、通学していたから、まだバイオリンの君にも巡り合つていなかったけれどもね……」

圭一郎が指摘するように、一は浜民の小学校を首席で卒業して以来は、母方の伯父の工藤常象の家、そして伯母の海沼イエの家、今の長姉の嫁ぎ先と、ずつと親元を離れての盛岡の寄ぐう生活だつた。

そして今も何かと手をとり合っているグループは、級長の阿部修一郎と副級長の吉田昌作、小沢恒一、宮崎道郎、そして代議士のむすこである伊東圭一郎と、坊主のむすこである石川一の五、六人であつたが、圭一郎以外は、みな高等小学校時代は一つ上級の先輩たちだったのである。

一は高等小学校に在学中から江南義塾にも通いつつ努力して、四年に進級と同時に難関の盛岡尋常中学校に百二十八人中第十位の好成绩で入学したのだったが、当時の新入生たちは、ただ身長順に整列させられると、

「氣をつけ！ 番号ッ！」

と軍隊式に号令をかけられ、

「よし、四十三番までが甲組、四十四番から八十六番までが乙組、残りが丙組だ。今度分かれたら、あの甲、乙、丙の立て札の前に行つて各組ごとに並び直せ。わかった者はハイと叫んで手をあげろ！」

「はい！」

「よし。それでは、分かれ！ 集まれッ！」

こういう号令一下、新しいクラスが決まったのであった。だから、甲組には背高ノッポばかりが集まり、逆に丙組にはチビッコばかりが残った。圭一郎も一も昌作も、恒一も修一郎も、入学当時は目立って小柄だったのである。

そのころはまた日清戦争の後のこととて、富国強兵熱が盛んであり、先輩たちの中からも米内光政とか八角三郎とか小林吉助、原敢二郎、及川古志郎らが『素養団』をつくつて軍人志望にうつつを抜かしている時代でもあった。でもまたその及川古志郎も『古事記』の研究グループを別につくつたりしている文学少年でもあったのだから、軍人熱と文学熱とが、それほど矛盾を覚えさすというほどでもなかった。それで石川一も『素養団』に加わつてもいたほど

だが、なんととっても丙組の者たちは体格上恵まれていなかっただけに、その点軍人組とは縁遠いだけのことであつた。

その代わりというか、文学熱の方では決して他のクラスに負けていなかった。二年生になつてからは組がさらに四組に改められ、一らは丁組に入れられたので、それからは『丁二会』というこんにやく版ずりの文芸同人誌をつくつて、全校中でも目立つほどの存在となつていた。

常々Pのようにかわいがつてくれていた二年上級の及川古志郎に、新たに同志たちと回覧雑誌を創刊するため『素養団』の方はやめたいと申し出ると、

「それもよからう。でも本を読むことはこれからもいっそう必要だろうから、家中の蔵書を全部読みこなすつもりで、これからも引き続いて来いよ」

と、既に不健康そうな一の将来を見越したようなおもうさであつた。

「その雑誌の名は何というんだ？」

「まだこれからつけるところです」

「じゃ僕がつけてやろうか。そうだな……ええと……」

『和魂』と書いて『にぎたま』と読むのはどうだ？」

「にぎたま？ 少しむずかしすぎませんか。面白いですけれどもねエ」

「じゃア「丁二」にするんだな」

「甲、乙、丙、丁の丁ですか」

「そうだよ。君らは一番チビッコ組の『丁』なんだろう。だが、これにへこたれずに、恥じらわずに、逆にその『丁』をこそ打って出すんだ。コンプレックスを抱くことは人間にとつて最もいけないことだ。そういう場合も、むしろこれを積極的の表面に立てることで、それは光明とも変わって来るんだから……」

『素養団』からは退いても、快く受け入れてくれる及川古志郎の家には、引き続いて一はよく通った。かわいがってくれるからというのではなく、豊富な蔵書が魅力だったからである。

長姉の田村家は新山小路にあったが、かき根越しに、パイオリンの音はもれてきても蔵書というほどのものは何もなかった。それに一にもドシドシ本を買うほどの学資の余裕はない。そこで及川の家に通っては手あたり次第にむさぼり読んだ。それに上級生には古志郎の他にも金田一京助や、小笠原謙吉らがいて、既にそのころから坪内逍遙や二葉亭四迷、森鷗外、山田美妙、幸田露伴らの本を次々と読んでいたのだった。

そうしたある日の放課後のこと、ひとり不来方城址にやってくる一は、そこで思いがけなくも金田一京助が先に陣取って読書にふけている姿をみとめた。葛の生い繁った石がきの上に腰をおろし、足を投げ出しているのに、見とれるようにして一は近寄っていったが、そつと背後に回るつもりが先に見つかってしまったのだ。

「何を読んでるんですか」

返答する前に本を閉じた京助は、そのままの目の前にその本を近寄せてみせるのだった。六年前に自殺し果てた近代浪漫主義の開拓者である北村透谷の本であった。

「ちょっと見せてください。あ、これ！ 金田一さんが読み終わったらぜひ貸してください」

「いいよ、どうぞ。それになんなら島崎藤村も樋口一葉もあるよ。たいがいな作品は集めているはずだから……」

これにはさすがの一も驚いてしまった。

「なに、僕もまた先輩から受けた影響だ。君らが入学して来た年に卒業していったから知らないだろうが、私の先輩に原敬のおいの原達とか小笠原敬三というのがいてね、それぞれ抱琴、黄花というようなペンネームで『文庫』という文学雑誌に発表していたことがあるんだよ……」

「ああ、あの有名な『文庫』にですか」

「その刺激を受けて、僕や、野村長一（後の筆名、胡堂）君なんかもほんのちよつとばかり文学をかじりだしたというわけだね」

「そういえば『反古袋』の田子一民さんもその一人ですね。野村さんたちの社稷吟社派の短歌に對抗して……」

「對抗して」といった一も、またそれらの活動に刺激されて文学グループを固め進めることになるのだが、そういえば、丁二会の見聞雑誌も対抗的に創刊しはじめたようなものであった。